

* 自然神学の社会科学への拡張

後期オリエンテーション

1. 自然神学とその歴史的展開

1-1: 自然神学とは何か 1-2: 自然神学とキリスト教思想（弁証と論争）の形成

1-3: 自然神学と自然学・自然科学 1-4: 自然神学の古典的な諸問題

1-5: 自然神学の拡張と聖書 11/17

2. 自然神学の拡張と科学論

2-1: 聖書の社会教説 11/27

2-2: 聖書の経済・環境思想 12/1

2-3: 聖書の政治思想 12/8

2-4: 自然神学から社会科学へ 12/22

2-5: キリスト教思想と科学技術 1/5

2-6: キリスト教思想と生命 1/12

2-7: キリスト教思想と脳科学 1/19

フィードバック

<前回> 自然神学と自然学・自然科学

(1) 古代科学・中世科学

1. 自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ

古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界
→中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）

12世紀ルネサンス、13世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ

4. 12世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ

13世紀以降の西欧中世の科学的発展

5. 二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道

→ 自然科学の基本前提

自然の合理性と人間理性による理解可能性

7. 自然神学：世界の秩序の探求から神へ

神の存在論証

(b) 宇宙論的類型：トマス（5つの道）、ニュートン、人間原理

・ 経験的事実から神へ（因果律、目的論）

・ 運動・変化の存在／「原因—結果」の連鎖／第一原因

→これを神と呼ぶ

8. 中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。

(2) ガリレオ裁判とは何か

4. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかったのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。→プロテスタント的新解釈に対して、伝統的解釈を防衛する。

(3) 科学革命とキリスト教

1. マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

(4) ニュートンとニュートン主義の自然神学

1. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること(=宗教的業)であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。
新しい科学的知識は、伝統的世界観への批判を通じて伝統的なキリスト教への批判として機能できただけでなく(理神論、唯物論、無神論)、この同じ新科学によるキリスト教の擁護論(=ニュートン主義)も可能であった。
2. ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌
自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈
 - ①パントクラトールあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調
 - ②無神論論駁のための神の存在論証
「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない。」(ibid., p.760)
伝統的な自然神学における「意図(デザイン)からの神の存在論証」
 - ③自然哲学とその神学的根拠
自然哲学的前提は、さらにその根拠を知性的で力ある神の支配にもつのである。
5. 二つの自然哲学：機械論的と錬金術的。錬金術者ニュートン。
機械論的自然哲学：物体、もの。受動的な自然(外力なしに運動状態は変化しない)
錬金術的自然哲学：生命、物質。能動的な自然
8. 「神の支配」による諸領域の統合、無神論を論駁するための科学
9. イデオロギーとしての自然神学・自然科学。デザイン神学(Design Theology)
 - 1) 世界における見事な秩序・法則
 - 2) 偶然ではない
 - 3) デザイナーとしての神の存在
10. ボイル講演：ニュートンの弟子たち(ベントリー、デラム、クラークら)の活躍。
11. イギリスの社会システムをいかにソフトランディングさせるかという問題
絶対王政と表裏一体の国教会
穏健な国教会(広教主義)・穏健なピューリタン：ニュートン主義
ラディカルな反国教会主義・共和制：新しい科学に基づく唯物論

1. 自然神学とその歴史的展開

1—4：自然神学の古典的な諸問題

- ・ニュートン主義のデザイン神学と進化論
天文学から生物学への争点の移動

<問題と視点>

聖書の創造物語とそれに依拠したキリスト教の創造論、それに対するダーウィンの進化論。この両者はどんな関係にあるのか、矛盾するのか、しないのか。歴史的事実関係を確認しつつ、冷静な理解が大切である。

<「科学と宗教」の関係史のアウトライン>

未分化／調和
分化／区別(専門化)／緊張
古代 中世 近代初頭 啓蒙・19世紀 20世紀 21世紀
ニュートン ダーウィン

（1）啓蒙主義と聖俗革命

1. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。

村上陽一郎は、これを聖俗革命と名付けた。

第一段階：知識を共有する人間の側の世俗化

知識の担い手：神の恩恵に照らされた特定の人間→すべての人間

第二段階：知識を位置付ける文脈（この中に科学と哲学の分化が含まれる）

「神—世界—人間」→「世界—人間」

2. ニュートンの場合に見たように、17世紀における科学的知は、「神—世界—人間」の文脈において展開し、この文脈において、ニュートン科学は社会に浸透していった。こうして成立した「近代科学」は、次第にその元来の文脈から離れ、一つの自律的な活動として自立して行く。ここに啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）が誕生し、その後の近代的知のモデルとして機能することになる。「宗教と科学」の対立図式は、この延長線上に発生することになる。

3. 代表例としてのラプラス

「われわれは、宇宙の現在の状態はそれに先立つ状態の結果であり、それ以後の状態の原因であると考えなければならない。ある知性が、与えられた時点において、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っていると、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう。人間の精神は、天文学に与えることができた完全さのうちに、この知性のささやかな素描を提示している。人間の精神が力学と幾何学とにおいて発見したものは、万有引力の発見と結合することによって、同じ解析的表現のもとで世界体系の過去と未来の状態を理解できるようにした。」（ラプラス、『確率の哲学的試論』、岩波文庫、10頁）

4. 注意点：科学の分野における相違あるいは時差

（2）進化論の衝撃

4. 19世紀の自然神学：生命現象という最後の砦

自然神学（デザインからの神の存在論証）は、18世紀の啓蒙主義の登場にもかかわらず19世紀の前半までは（ウィリアム・ペイリー）十分に説得性を保持していた。

- ・自然界における見事な秩序という証拠から神の存在を推論する

神の自然界の調和の創始者

- ・生物の環境への適応に関してもっとも信憑性のある説明を与えた

5. キリスト教的生命論：アリストテレスの生命論＋聖書の創造物語

個体（生命体）を、形相（その個体の種を示す）と質料（個体化の物的基礎）から捉えるものである。問題は、アリストテレスの形相が不変であり、したがって、ここから、種は変化しないという帰結が生じる点にある。こうした生命理解が、長い間、キリスト教世界において受容され続けることによって、キリスト教的生命論が種の不変性を主張するという見解が生まれた。

6. ダーウィンの進化論は、生命の環境への適応についても——突然変異と自然淘汰（偶

然と必然)との相互作用——、神なしに説明する可能性を提示した。ペイリーに至る自然神学の伝統は一端大きな区切りに達した(=終焉?)。(現代宇宙論における「人間原理」により議論はさらに継続中。)

7. 19世紀のダーウィンの進化論の登場→進化論論争、しかし、初期の論争は、科学も宗教がそれぞれの範囲を逸脱して行った感情的応答と言わねばならない。
- ・19世紀の進化論は十分に科学的か? (進化論が厳密な科学となったのは20世紀後半と考えるべき。集団遺伝学とDNAの発見)。
イデオロギーとしての進化論、社会ダーウィニズム。
 - ・進化論は神の否定を帰結するとは限らない。第一次原因と第二次原因(直接的と間接的)の区別を導入すれば、神の摂理(第一次原因)と進化のメカニズム(第二次原因)は対立すると考える必然性はない。第一次原因としての神は第二次原因を通して働く。
8. 対立図式の社会学的説明
ウィルバーフォース伝説(1860年)の流布や、ドレイパー(『宗教と科学の闘争史』1874年)、ホワイト(『科学と宗教との闘争』1896年)の著書の出版。「科学と宗教の対立図式」は1880年代以降の産物。19世紀後半に、自立した専門家集団として登場しつつあった専門科学者の集団とそれまで生物学をリードしてきた聖職者兼科学者の集団との間の、つまり二つの知的エリート集団間の闘争。

(3) 創造科学

9. 19世紀的な対立図式は、宗教と科学の区別・分離論によって、原理的には解決した。しかし、現実には様々な対立が残っている———。
10. キリスト教サイドでの対立論の代表は、「創世記の創造物語こそが真の科学である」とする創造科学論者である。その議論は次の三点に集約できる。
- 聖書の不可謬性(この点で、キリスト教原理主義に属するとも言える)
 - 生物のすべての基本的類型(種)は神に創造されたものであり、不変。
 - 世界規模の大洪水が実際に起こったこと(洪水地質学)。
11. 進化論裁判・反進化論運動: 創造論者あるいは原理主義
- ・進化論を公教育から排除する(両親の信仰に反している進化論を子供に学ばせない権利)
 - ・進化論と創造論とを対等に教えることの要求(進化論は擬似科学である)
 - ・学会・大学での活動・世界規模における拡大

(4) 現代キリスト教神学と科学

12. 神学と科学との分離=対立の原理的回避 → 無関係・無関心
進化論に象徴される近代科学との関係をめぐり、20世紀の神学の有力の流れは、科学と宗教との分離・区別を選択することになった。不毛な対立を回避し、本来の専門領域に専念するという方向付けである。宗教の純化(心の救いの問題に集中する宗教)。つまり、本来、宗教の役割は科学とは異なっており、それぞれが固有の役割に専念すれば、無用な対立は回避できるはず、宗教と科学の間には関係も対立も存在しない、

S. Ashina

対立は、宗教が擬似科学となり、科学が擬似宗教となるところに生じる、という議論である。

13. そのために採られたのが、意味と事実との区別——宗教は人間の生きる意味・価値に関わり、科学は事実に関わる——、あるいは客観的真理と主体的真理（キルケゴール）の区別という論理である。たとえば、ブルトマンの聖書の非神話論化あるいは実存論解釈はその典型である。こうして、宗教と科学の対立は原理的に解決を見たと言える。
14. 創造物語に表現されているのは、創造の善性と概念化された信仰内容であり、創造物語は、事実のレベルで、宇宙や人間の発生を論じているのではない。聖書は科学の教科書ではない。大切なのは、人間には神によって与えられたそれぞれ固有の存在意味、存在価値があるとの信仰、そして人間は他の存在者との関わりにおいて活かされて存在しているというメッセージである。

（5）分離・無関係から対話・再統合へ

12. 1970年代以降、思想的状況は大きく変化した。

近代科学技術の問題性が顕わになり、人類は大きな問題に直面していることが、無視できなくなり、宗教も科学も（宗教者も科学者も）、同じ問いに直面し、共通の課題を持っていることを意識せざるを得なくなった。

こうした状況を直視することによって、対立論や分離・無関係論では、もはや済ますことができない、新たな対話を模索することが必要であるとの議論が有力になりつつある。宗教と科学との対話論は、現代のキリスト教思想の主張テーマの一つである。

13. 区別の上にたった相互関係の確認

14. 21世紀の宗教と科学の関係は、どうなるか。可能性は三つある。

- 1) 19世紀的な対立図式に戻る。
- 2) 20世紀的な分離・無関係の図式を継続する。
- 3) 新しい関係構築、対話の構築を試みる。

<参考文献>

1. 芦名定道編 『科学時代を生きる宗教——過去と現在、そして未来へ』北樹出版。
芦名定道 『宗教学のエッセンス』北樹出版、『自然神学再考』晃洋書房。
2. ラプラス 『確率の哲学的試論』、岩波文庫。
3. 村上陽一郎 『近代科学と聖俗革命』新曜社。
4. リンドバーク／ナンバーズ編 『神と自然』みすず書房。
5. 池田清彦 『構造主義と進化論』海鳴社。
6. 松永俊男 『ダーウィンの時代 科学と宗教』名古屋大学出版会。
7. マクグラス 『科学と宗教』『「自然」を神学する』教文館。
8. フランシスコ・J・アヤラ『キリスト教は進化論と共存できるか？ ダーウィンと知的設計』教文館。

<付論>

書評：フランシスコ・J・アヤラ

『キリスト教は進化論と共存できるか？ ダーウィンと知的設計』（藤井清久訳）、
教文館、2008年。

京都大学文学研究科教授

芦名定道（あしな・さだみち）

本書の著者アヤラは進化遺伝学の分野で著名な生物学者（現在、カリフォルニア大学アーヴァイン校教授）であり、本書は、反進化論思想として最近話題の「知的（インテリジェント）知^{インテリジェント}的設計（・デザイン）設計（ID）」論を論駁しつつ、「科学と宗教的信仰とが対立する必要はない」ことを示すことを目的としている。進化論とキリスト教創造論の間に深刻な対立（アメリカにおける公教育での進化論の扱いめぐる裁判など）が存在することは日本でも良く知られているが、「科学と宗教」の対立論は、現代思想の主流でも、キリスト教思想の代表でもない。対立論の対極に位置するのが科学と宗教の分離論であり、アヤラはこの立場に立っている。

本書では、まずキリスト教自然神学と進化論を代表する、ウィリアム・ペイリとチャールズ・ダーウィンの思想が検討される。多様な生物の複雑かつ精巧な器官とそれによる自然環境への見事な適応とをいかに説明できるかという近代生物学の基本問題について、ダーウィン以前において最も有力だったのは、キリスト教自然神学の学説であった。ペイリは、この問題は全知にして全能な神（知的設計者）の「設計」を前提とするときにのみ解決可能になると論じたが、そこには、生物に見られる様々な不完全性や機能障害の説明に関する難点が存在した。ダーウィンの進化論は、このペイリが取り組んだ問題に科学的解答を与える試みであったと解することができる。実際、著者が論じるように、「進化」はダーウィンの発明ではなく、キリスト教思想の中にも類似の議論が確認可能である。むしろダーウィンの真の新しさは、「自然選択」論に求められねばならない。生物の見事で多様な設計とその不完全性とが、知的設計者としての神なしに、「生物の環境への適応を促す、自然的選択プロセスの結果」として説明されたこと、これが画期的だったのである。

続いて著者は、進化論が科学的事実であること——分子生物学による「生命の全体系統樹」の再構成などを証拠として——へと議論を進め、これに基づいて、ID論の徹底的な論駁を試みる。要点は、次のようになる。ID提唱者は、進化論では説明できないとされる生物学的現象（目などの「単純化できない複雑なシステム」）を挙げることによって、ID論の正しさを論証しようとするが、これは、「進化論がくつがえされれば、その分だけIDが確認される」という誤った二分法に基づいている。ID論は、検証可能な科学的仮説ではなく、神に自然の不完全性や欠陥の責任を帰する点で、良き神学でもない。進化論については、神の世界創造と現実の悪（欠陥や不完全性）とがいかに両立できるのかという古代からのキリスト教神学の難問に一つの解答を与えたとの評価も不可能ではない。

著者の立場は分離論であり、科学と宗教にその専門領域を超えないことを要求する。この要求は、ID論だけでなく無神論的自然主義者（リチャード・ドーキンスら）にも向けられねばならない。著者によれば、科学は「方法的に自然主義的」であるが、「形而上学的唯物論」（＝反宗教）ではない、科学と宗教とは「知識の重複しない領域」であり、本来対立することはあり得ない。形而上学的無神論とID論という二つの原理主義の克服こそが科学と宗教の適切で積極的な関係構築の前提であることを考えるならば、本書は、このような課題に取り組む者にとって、適切な出発点、良き入門書と言わねばならない。